

今年は、王者駒大が5連覇に挑む一方、東海大が初Vを、中大が最多の15勝目を目指している。今年は、前記の3校と6強をなす我が日大、日体大、順大が頂点を虎視眈々と狙っている。

関東大学の中で、19校がこの箱根駅伝に出場できる。前年度、10位までの学校がシードされ、これ以上はこの年の学生駅伝（出雲駅伝・全日本学生駅伝）の成績の良い9校が選ばれる。その他に、1チームが参加できるのだが19校には入れなかった学校の中から強い選手だけ10人のチームが関東学連選抜として参加する。帝京大・慶応大・青山学院大・東京農業大等々さまざまな学校の混合チームなのだ。

大正9年に、当時の東京高等師範（現在の筑大）が初めて勝ってから大戦中は中止になったものの、かなり古い歴史を持っている。選手の数には大学によりバラバラだが日体大チームは、なんと400人以上の選手がいる。少ない人数でさえ50人ほどの選手の中で走るのはたった10名だ。いかにこの箱根駅伝に参加出来る選手は幸せ者か分かる。選ばれ20数キロの道を沿道いっぱいの人々に声援され、白バイ・パトカー・報道テレビに中継され走っている選手達は、自分の持っている力以上のパワーが出せるものだ。だから、日大2区の選手、順大の8区の選手がペースを乱してしまいダウンする。何回見てもフラフラになった選手には心の中からガンバッテと応援するのは小生だけではない。小生も箱根駅伝とまではとても行けないが少しは理解出来る。それどころか、なんか自分がこの箱根路を走っているとさえ思う。伴走の先生が自転車で追いかける岐阜市の中学駅伝とは全く違う世界だが……。

各選手は、ハーフマラソン（21km）を1時間前後で走る力を持っている一流選手ばかり。この選手の中から早大の瀬古、渡辺、現役では尾形剛選手（中国電力）そして伝説の中距離ランナー岩下察男がこの箱根路をステップに世界の舞台へ飛び出したのだ。

1月2日、箱根泊まりは近くのホテル、旅館は全て満室。静岡の友人が取ってくれた宿は、130年の歴史があるあの「富士屋ホテル」一泊6万円也。「ヒィー」仕方がない。正月休みだから家族連れが多い。高級ホテルには似合わない連中が小生達だった。

1月3日、朝8時半富士屋ホテルの前で復路を走る選手を応援し、すぐ東京大手町ゴールに小生も車で向かう。混んではいるが、高速、下道と空いている道路を急いで大手町に12時頃着いた。駐車場も満車、見物者も満員。仕方がないから大手町ゴール近くに駐車違反。正月早々だから、また箱根駅伝ゴール近くだからお巡りさんも許してくれるかも……ゆっくり観れた。トップでゴールしたのは亜細亜大！皆びっくり、予想外の学校だった。だから駅伝は面白いのだ。強い大学が勝てるのではなく、10人がそれぞれ一番良い状態で走ったチームが優勝出来るのだ。2位 山梨学院大、3位 日大、4位 順大、5位 駒大だった。

ゴールしてくる選手は全力で走ってくるから、もう息絶え絶え。仲間に抱きかかえられている。とても感激した。「ご苦労さん、頑張ったね！」と声をかけてやりたい選手ばかりだった。総合優勝は亜細亜大、往路優勝は順大、復路優勝はなんと法大だった。ゴールの日大応援団の近くで昨日走ってきた選手がいた。あの2区で失速してしまったケニアのサイモン選手だ。声をかけた。「オイ、サイモン。来年はリベンジしてくれ」「すみません先輩。来年はガンバります」と屈託なく笑顔で答えてくれた。この2区で失速したサイモン君は第81回（昨年）の3区で区間新記録を出した選手だったのに……。何が起こるか分からないのが箱根駅伝なのだ。又、第3回大会（大正11年）第7区であの衆議院の河野洋平氏の父、河野一郎氏（早大）が区間新記録で走っていた。東大も7回まではシードされていたのだから……。